
願いよ…

鈴蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

願いよ…

【Zマーク】

Z1162BA

【作者名】

鈴蘭

【あらすじ】

蘭ちゃんのせい…蘭ちゃんさえ…蘭ちゃんもえ…来なければ…

四人の転校生が来てから始まつた悪夢…

愛してしまつた…彼女を…

快斗をかえして！返してよおお！

もう、遅いんだよ、青子。諦めろ…

返してよおお！

青子と快斗のすれ違い。蘭を心から愛する快斗。快斗を心から愛する青子。

かなうことのない恋をする2人。

片思いする青子と快斗。

蘭は新一を新一は蘭を。両想いの蘭と新一。何もしていない蘭に青子が…

！？

「お前とは…単なる幼馴染だぜ？」

「私は好きなの…－快斗…大好き…－」

「青子ちゃん…ゴメンナサイ…・・・」

「蘭…愛してるよ…」

「新一…私もだよ?」

すれ違う関係。どうすることもできない4人。何が原因なのか、何が悪いのか…それすら分からなくなる青子。はたして4人の運命は

…！？

悪夢の始まり

「はじめまして、毛利蘭と…」

「工藤新一と…」

「富野志保…」

「…と鈴木園子です…！」

ここ、江古田高校2・Bの教室になんと四人の転校生が来たのであつた。

なぜ、四人の転校生がきたのかといふと、数日前のことであった。

「先生、私たちってどこの高校行くんですか？」

「ああ、学校見学の…確かに江古田高校2・B。一年間いるんだからな？」

「一年間もいるんですか！？」

「そうだ、おまえたち四人は仲がいいから特別に同じ高校にしてやつた。まあ、ほかのやつらよりはいい高校だから、ついていけるかが心配なだけだ。」

「大丈夫よ、こっちには工藤君がいるもの。」

「そうだな…」

「というわけで…」

四人が江古田高校に一年間の見学者としてきたということだった。

そのことを、江古田高校の2・Bの先生がクラスメートに細かいところまで説明した。

「じゃあ、自己紹介…まあ、趣味、入っていた部活動、得意なことを…毛利蘭さんから…」

先生が言うと、蘭は続けた。

「えつと…私の趣味は、家事、掃除で、入っていた部活は空手部です。一応主将でした。」

蘭の言葉に男子全員が意外そうに「ええええええ！？」といった。しかも、みんな細い手足。そして、趣味が家事と掃除。いかにも家庭的である。

「それと…得意なことも空手です。」

男子も女子も驚く一言。

「えつと、俺は…趣味は読書（推理物）、部活はサッカー。得意なことは推理、以上」

女子は一斉に「キャラーツ」と叫ぶ。

まあ、仕方ない。あの、高校生探偵工藤新一なのだから。

「私は薬を開発する（実験）、部活は科学部、得意なことは工藤君を実験台にすること。」

最後の言葉に皆、不審に思つたが別に気にしていない…。

「私は、新一君と蘭をからかうことが趣味で、部活はテニス部！得意なことも2人をからかうこと…」

女子も男子も園子の言葉に意味不明だったが、特にまた気にしていなかつた。

先生は一度咳払いし、四人が言った部活は江古田高校にすべてのいることを説明し、四人の席を指定した。

新一は隣なし。

園子は後ろから一番目の席。

志保は園子の右ななめ前。

そして蘭は…

あの、世界的マジシャンの息子、黒羽快斗の隣の席となつた。

(わ……ラッキー！)

快斗はそう思つたとたん、蘭は視線を感じた。

その視線の先には…

蘭そつくりの少女がいたのであつた。

悪夢の始まり（後書き）

感想待つてます！

挑戦状

休み時間になると、新一と蘭と志保と園子は一斉に一つにかたまつた。

「ねえ、私たちどんなことを観察すればいいわけ?」

「さあ……」

「まあ、一応クラスメートの団結力とか?」

「そんなところでいいんじゃない?」

四人の意見が決まったところに快斗が蘭の目の前にやってきた。

「ねえねえ、みんなは仲いいの?」

「うん! そうよ。一応、こっちの大馬鹿推理の介と園子は私の幼馴染。志保は転校してきたの。それで今では親友って感じよ?」

一通り言つと快斗は「ふうん……」といいながら新一をじろじろと見始めた。

「な、なんだよ……」

「いや、男一人で……」

「ああ、園子が女つて見えねーからな。」

「どういう意味よ、新一君! じゃあ、空手抜群の蘭はあ?」

「蘭はねえ……うーん、手ごわい女。」

「どう意味かな? 新一。」

ものすごい勢いで睨む蘭に新一は冷や汗をたらしながらすみませんと謝った。

蘭はクスッと無邪気に笑つて「よろしい」といつた。

そんな無邪気なところも新一と快斗にはかわいらしくと思つた。

「そうだ、俺は黒羽快斗。一応……」

ポンッと音を立てながら手から薔薇を出し、蘭に差し出す。

「マジック得意。よろしくな!」

「わあ、すごい!」

「へえ、すごいじゃん!」

「やるわね。」

女子たちは歓声をあげるが、新一だけがつまらなそうに快斗を見る。

いわゆる、快斗に嫉妬。

「ちゅうと、快斗、あんまり持てるからってねえ……」

そこには、蘭そっくりな少女が立っていた。

「ラ、蘭？」

園子が言つ。

しかし、どこか違う。

「いやちげえよ

「誰？」

「中森青子つていうの。快斗の幼馴染。」「へえー！」

蘭は興味ありげな顔をして聞く。
「だれかにてるねー！」

青子を見て言つ蘭。

それにズケツと転ぶ新一と志保と園子と快斗。2人は自分にそつくりと思つていなかつた。

しかし、これは青子の挑戦状。

青子と蘭はいつたいどういう関係になつていいくのか…

それが、これから始まる悪夢だつた…

挑戦状（後書き）

今回短かつたんですが…

じつは、前回の小説で主将のことを私はキャプテンと言つていました。

じつは、主将のことをキャプテンとも「う」とあるんです。

私が手書きてるんだいろいろと知つてると、また、変なところがあつたら教えてください。感想待つてます！

止めるひとのやらない恋

（今日も快斗、顔が赤くなつてた…）

青子はそう思いながら、一人下校していた。後ろのほうには新一と蘭と園子と志保とそして快斗がいるのだった。
もちろん、快斗は蘭の隣にいた。蘭は一応新一の隣だつたが、新一が快斗に嫉妬しまくつていたことは言うまでもない。

いつもは幼馴染の快斗と帰つていた登下校のこの道。たまに道草食つて遊んで毎日が楽しかった。

しかし、四人の転校生が来てから快斗は青子とではなく、青子につくりの蘭を中心に戻るようになつた。

青子は教室の中でも親友の桃井恵子と小泉紅子としか話さなくなつた。というより、快斗が話しかけてこないのであつた。

（蘭ちゃんにいつもべつたり…）

そう、蘭が快斗の目に現れてからだつた。こんなにも変わつてしまつた日常の原因は。

（蘭ちゃんの…蘭ちゃんさえ…蘭ちゃんさえ…来なければ…悔しい思いをする青子。）

それを知らない快斗と蘭。そして、ほか三人。

「なあ、蘭、今田の「J飯なんだ?」

(え?)

青子は後ろから黙ってきただに耳を傾けた。

「ああ、ハンバーグよ。」

(なんだ...上藤君か...やつこえは...上藤君と快斗って...やつくつ。)

今頃気づいた青子。

しかし、この際どうでもよかつた。

たとえそつくりでも、青子は快斗しか愛するひとはできない。

だからこそ、この恋はあきらめたくないのである。

(快斗が...失恋だったらここに...そしたら...青子のほうにも希望はあるよね? 蘭ちゃんさえになくなれば、快斗だつて諦めるよね?)

そう考えた時だった。

蘭たちや ふれえこなくなれば

やつ思つた時、青子は最悪なことを計畫してしまつたのであつた。

蘭がいなくなぬ計畫を…

止めるひとのできない恋（後書き）

わあ～、青子ちゃんが悪人にいい！？
誤字脱字、田だつたら「ermenナサイ」・・・！

計画実行

私の名前は中森青子！

江古田高校2・B、元気な明るい子です。

でも、今は明るくも元気でもない。

最低な、どん底に落ちていいる青子です。

そつ、青子は警部の娘ながら最悪なことを計画していつてこらの
です。

だつて、悪いのは蘭ちゃんだもん。

蘭ちゃんさえ江古田高校に来なければ、青子はこんなこと計画しな
かつたもの。

だから、悪魔を追つ払うの。

青子が正義の味方になるの。

青子が頑張りなくては快斗が悪魔に飲み込まれてしまつもの。
快斗のためにも、青子のためにも頑張らなくちゃいけない。

警部の娘なのに？

最低？

それが何？

青子は正義のためにやつてるのよ……みんなどうかしてね。
青子、つかまらないもん。

お父さんが警部だし。

青子は正しいとやつてるもの。

「青子ちゃんー。」

そらきた。

勝手にやつてへぬひぬれこ女。

むかつく女。

快斗を奪った女。

「何? あ、ちよつけじこせ。ちよつときでー。」

青子は無理矢理彼女を屋上へ連れてこく。

屋上へ着くと涼しい風が青子たちを見守るように吹いている。

さあ、ラストチャンス。

今からいう質問に青子が思つた通りにこたえてくれれば何もしない。
違つていたら、その場で…

屋上から突き落とす。

「蘭ちゃん、今からこいつ質問なんだけど…」

「質問?」

「そう、質問ー。」

「なんの?」

「いいから。じゃあ、蘭ちゃんに好きな人はいますか?」

「え…」

「いるの? いないの?」

「い、いるかな…」

あ、そう…

つたく、

役立たず。

「その人はあなたの近くにいますか？」

「うん…いるよ…」

へえ…いるんだ…

快斗なんでしょ？

「その人は…誰ですか？」

素直に言つていいのよ？

ただし、回答によつては

あなたの命は

ないわよ?

「私の好きな人は…」

新
一
…

工藤新一だよ？」

え……？

工藤新一……？

高校生探偵の……快斗にそっくりな人。

その人が好きなんだ……

なんだ……なんだ……

そうだったの…なら…青子は蘭ちゃんの恋を応援すればいいんだ。

そして、工藤君と蘭ちゃんがけしかけたのを快斗が知る。
諦めて、青子に振り向いてくれる…。

いい！それいい！

「ねえ、青子ちゃん、何のために質問？」

「ううん、青子も好きな人がいるの…」
「…」
なってないかなあー！って！

「あ、そうだつたんだ！で？青子ちゃんは誰が好きなの？」

「快斗だよ！小さいころか大好きなんだ！」

「へえ～私も。私も新一が小さいころから好き。こつも守ってくれて…新一は私のことどう思つてるのか分からなになどね…」

哀しい顔をする蘭ちゃん。

蘭ちゃんでもこんな顔をするんだ。

確かにそうだ。

蘭ちゃんって気の強そうな感じじゃない。

空手をやつてるって言つてたけど、すごく優しかった。
だからこんなに悲しい顔をするんだ…

素直だから…

「蘭ちゃんー青子、蘭ちゃんの恋応援するー。」

「本当...?」

「うん！だから、蘭ちゃんも青子の恋応援してー。」

「うん！約束しようつー。」

青子、さつきまで殺氣が漂っていたのに今は蘭ちゃんの友達になつちやつたし……

なにやつてんだか、青子つたら。
でも、聞いてよかつた。

あとから後悔するなんていやだもんね。

でも……やっぱり蘭ちゃんへの違和感は変わらないんだ。

なんか、このままじやいけない。
もつともつと……

深い違和感がある……

蘭ちゃんと仲良くなつたらいけなによつな……

悪夢が待つてこるみづな…

私はそのまま、家に帰つて夜になつてベッドに入つて寝てしまつたら
変な夢を見た。

すいじやな夢…

快斗が…快斗じやなー・・・

青子とは単なる幼馴染だよ

青子?あんな奴好きじやねーよ

蘭ちゃん…おれ、蘭ちゃんの「と繋いでいる…

付き合ってくれねーか?

なんで?なんで工藤なんだよー俺は…こんなにも蘭ちゃんを離してゐるのに…

蘭ちゃん、俺はあわいめなこよ?

蘭ちゃんと工藤が付き合つた?
工藤が消えればいいんだな?

快斗しか出でこない夢。

嬉しいはずなのに、内容は最低だった。

まるで…これから出来事を予知しているかのよう…

計画実行（後書き）

感想お待ちしています！

夢が現実になる始まり

変な夢だつた。

責任は朝起きるとい、夢で見た、快斗が快斗じゃない夢を思ひ出しきいた。

責任を幼馴染としか見てなく、指しにほゞ蘭ちゃんを愛していた快斗。

田が合ひのない快斗。

夢の中でもやうなんだ…

現実でもやべ。

快斗は田を合わせてくれない。

いや、田はあつてるんだと思ひ。

でも、その田は蘭ちゃんへと向かつていぬ。

責任を蘭ちゃんと勘違にしているよつた眼で見ていぬ。

でも、すぐにわかつてしまつのだ…

だから、すぐに田をやらし、蘭ちゃんのほうへと向かつていぐ。

どひつて…？

幼馴染つて本当に思つてゐるんぢやないの？

本当に、单なるクラスメートつて思つてゐるんぢやないの？

ይ.፲፻፱፭

蘭ちゃんが来て……蘭ちゃんに一悶ぼれして……

そうして、電子を見なくなつた。

青子の存在は、快斗のなかにいるの？

快樂... 罷子は「んなにやねん...」と快樂の「ん」が好物なの!」

朝ご飯食べた？

お父さんに「行つてきます」つて言つたつけ？

比類問題 符か書子の頭に浮かひあかる

まあ、いいや。

ちよつとぐら二...ちよつとぐら二二二じやない。

青子はそう思つて、蘭ちゃんのほうを無意識に見てしまつた。

N
e

青子は、蘭ちゃんを信じてる。

だから…恨みはしない…よね?

なんだか不安が青子の中を渦巻いていた。

なんだろう…

これから嫌なことがあるやうな気がして…

そう思つてゐ時だった。

いきなり、蘭ちゃんがバタッと音を立てて倒れたのだった。

無理…してたんだ…！

真っ青な顔をして倒れる蘭ちゃん。

女子が悲鳴を上げる。

快斗は蘭ちゃんを抱き上げようとした時、素早く工藤君が蘭ちゃんを抱き上げた。

お姫様だつこわれてる蘭ちゃん…「ひやまし…」と言つたといふ
だけど、そんなこと、考へる暇なんてない。

工藤君も青い顔をして蘭ちゃんを急いで保健室へ抱き上げながらこ

つた。

蘭ちゃん…大丈夫かな…！

青子は蘭ちゃんの親友の園子ちゃんと面野さんを連れて保健室へ向かつた。

蘭ちゃんはさつきよりは顔が赤くなっていますやと寝ていた。

きれいな顔…

かわいらしい顔…

「新一君！蘭は？！」

あせる園子ちゃん。

青子もその答えが聞きたい。

「ああ、先生によると睡眠不足だよ。」

「変ね、蘭が睡眠不足なんて…」

「ゲームでもしてたんじゃないの？」

私の発言に三人は「ハア？」とも言いたそうな顔をした。

え？ち、ちがうの？

「何言ひてるのよ。蘭はゲームなんかしないわ。蘭がやるとこえれば家事と掃除、そして工藤君のお世話。あと…空手ね。」

あ、そななんだ…

そういえば、自己紹介の時いつてつたつけ。

そんな話しをして、ついに快斗が青子たちの目の前に現れた。三人がキッと睨むように快斗を見る。

まるで、「蘭が倒れたのはおまえのせいだ」とでもいふよな顔。青子は何も言えず、ただ黙つているだけだった。

「蘭ちゃんは…？」

「寝てるわよ、見てわからない？」

宮野さんの嫌みたつぶりない方に快斗が宮野さんを睨む。にらみ合つ工藤君と快斗、園子ちゃんと快斗、面黒さんと快斗。

青子はその場に居られなかつた。いることが許されるのだろうか？

青子は…

「この関係に入られることができるだらうか……？」

そつやつて睨みあつてゐるうちに蘭ちゃんが瞳を見せた。

きれいな澄んだ瞳は私たちを順に見ていく。

「あ……私……」

「蘭！」

一番最初に声を上げたのは工藤君だった。
嬉しそうな甲高い声。

「新……園子……志保……青子ちゃん……黒羽君……」

順々にいつていく蘭ちゃんは哀しげな表情だった。

「ごめんなさい……私……何してたんだろ……？」

「蘭はさつき倒れたんだよ……」

工藤君がベッドに寝ている蘭ちゃんに優しい声で言つ。

「そつか……ごめんね、迷惑かけちゃつて……」

心からそういうつていよいような顔で私たちに言つ。そんな表情もかわいらしかつた。

「蘭、何で睡眠不足だつたのか、心当たりある？」

宮野さんが单刀直入に言つた。

青子は同感した。

早く聞きたい。

蘭ちゃんに何があつたんだろう？

「空手の東日本大会が近かつたの。だから、夜まで練習してたの。

絶対優勝したかったから……」

熱心な蘭ちゃん……

きつとお父さんも知つてゐるんだらう、なんてよい娘なんだらう。

てね。

青子、蘭ちゃんのこと尊敬しちゃった。

「でも、蘭ちゃん…無理しちゃつたら余計迷惑だよ…次からはめちやんといつてよ?」

「まあ、いう人は、新一君にしてよ? 蘭を守れるのは騎士ナイトである新一君だけなんだから!」

「ちょっと、俺がいるじゃんか!」

快斗の声が保健室に響く。

青子も含めて五人が一斉に快斗を見る。

「え…何?」

「あんたに蘭は守れないわ!」

「蘭が守れるのはただ一人、工藤君だけよ?」

女子たちの攻撃が快斗に襲いかかる。

青子は

止めてあげたくない…

やへ、蘭ひやんのじとをあわいぬてほし…

やつ思い続けただけであった…

夢が現実になる始まり（後書き）

蘭ちゃんって本当に可愛いですね～！
というわけで、感想待っています！

男の対立

「えー、みんな知つていてると思つが、一ヶ月後に学園祭がある。そこで、うちのクラスでは劇をやることになつた。それを知つていた鈴木がシナリオを書いてくれたんだ。まあ、完全なラブロマンスだがな……」

先生の言葉に園子は「へへ」と、新一と蘭は「またあ……？」と、志保は「フツ」と笑つただけだった。

クラスメートは嫌がつてゐる奴もいれば、まあいいんじゃないか、と言つてゐる奴がいた。

そんなクラスを先生が一回ほど手を叩くと、生徒たちはハッとして先生のほうを向く。

「いいか？いまから役を決める。自分のやりたいものに手を上げるんだ。じゃあ、委員長、副委員長、よろしく。」

先生がそう言つなり、自分の机へと戻つてしまつた。

委員長らがシナリオを見ながら黒板に登場人物を書いていく。と、シナリオを見ていると、いきなり、副委員長の顔が真つ赤になつた。

「どうかしたか、副委員長！」

「…キ、キスだつて…」

「ええええええええええええええ…？」

副委員長とともに先生も含めて生徒（新一、蘭、志保を除き）は一斉に園子を見た。

「え…ふつりでしょ？」「プロマンスよ？これくらいいいじゃない。」

と平然と言つ園子。

帝丹高校に者は園子の描くシナリオには必ず「キス」を入れる」と知つてゐる。

なので、いまさら驚いたつて仕方ない。

「あ、でも、本当にしないよ？」

園子はにやにやしながら新一と蘭を交互に見る。

そんな顔には「あんたたちが主役をやりなさい」とでもこいつだつた。

「そ、それで、皆さんはどの役をやりたいですか？」

委員長が改めていう。

みんな、主役以外のものに手を上げていく。

そして、主役がまだ決まりずにみんな黙つている時だった。

一つの手が上がる。

「はいっ！先生！私は蘭と新一君を提案します！…」

「はあ…？」

「あんたたち、まだ約決まつてなかつたよね…？」

にやつと笑う園子。

うつと言葉を失う新一と蘭。

「先生！俺の手も上がってるぜ？！」

「な、なんだね？」

「俺が主人公やるから、ヒロインを…

蘭ちゃんに！」

「ええええええええ…？？？」

園子、新一、蘭が同時に言つ。

快斗はキヨトンとして「く？」といった。

「あんたねえ！もう主人公は決まったのよ！？」

先生、蘭と新一君で決定です！！！文句ある人、手をあげて！」
にらむ園子に誰も手を上げない。
とこう」と…

主役一人は新一と蘭に決まってしまった。

「ちえ・・・俺と蘭ちゃんのほうがよかつたのに・・・隣の席なんだしさあ・・・」

快斗はつまらなそうにそっぽを向いた。

授業が始まると、快斗が蘭に話しかけ始める。

「ねえねえ蘭ちゃん、明日の家庭科でクッキー焼くんだよね？」

「ええ、そうだつたような…」

「なら俺にちょうだい！」

「でも・・・先客がいるの・・・」

「だれ?」

目を光らせる快斗。

まるで猫。

「新一よ。」

「ふう〜ん・・・蘭ちゃんは工藤が好きなの?」

「...」

蘭は黙ってしまった。

快斗はそれを見て何かあつたのかと思つた。

「なあ、今日カフュにでも行こつぜ?」

「え・・・?」

「いいからさ!ね?」

「う、うん...」

蘭は仕方なく承知してしまい、放課後、快斗と蘭はカフュについた。

「かわいいところね...!」

蘭は店の中をきょろきょろとみて席に着く。

「ねえねえ、それで?工藤と何かあつたの?」

「ううん・・・ただね、私の片思い。」

「え?片思い!?」

快斗は蘭の言葉に驚きを隠せず大声を出してしまった。

「ちょっと、声がでかいよ……！」

顔を赤くしながら言う蘭。そんな顔でもかわいいと思つてしまつ快斗。

「新一……なんかさ、最近私に冷たいの。『ご飯作りに行つても田を合わせてくれない』……」

蘭は悲しそうに話を続ける。

「私がいなくなればいいのかなあ……つて。しかも、主役になつちゃうし。」

「蘭ちゃん……」

二人がそんな会話をしている、一個後ろの席ではなんと、園子と志保と新一が聞いていた。

新一は蘭の言葉に顔を赤くしたり、悲しそうな顔をしたりしていた。

「それで？新一君。あんたたちは両思いついてことになるけど……」

「……うつせ・・・」

「あなた、蘭のことが好きなら蘭は優しくしなくちゃ……」

園子と志保の攻撃に新一は顔を赤くしながらそっぽを向く。

「なんで冷たいのか、予想してみると…原因は黒羽君ね……」

「そうねえ…彼をどうにかしないとねえ、新一君。」

二人の予想はばっちりあたつていた。

新一は完全に快斗に嫉妬していたのである…

「あんたねえ、嫉妬するよりも、蘭にやれしゃして、蘭を黒羽君に渡したらダメ！」

園子の言葉は一生懸命応援するような声だった。

新一は「わかった」といつと、コーヒーを飲みながら一人をじっと観察して何かを考えていたのであった…

「それじゃあ、ありがとね、黒羽君。あ、おひるよ。」
蘭が席を立つ。

「いって。おれがおひるから。じゃあね！」

蘭は「そつ…ごめん！」と言いながら店を出て行つた。
三人は蘭の行動よりも快斗の行動をチェックしようと、快戸を尾行
するのであつた…

快斗が人気のないところに行くと

「そろそろ、尾行やめたら?名探偵たち……」

といったのであった。

三人は気づかれたと思い、新一がサッと姿を現した。

「気付かれてたか……」

といった……

男の対立（後書き）

えっと、長くなりそうだったので後回し。
感想待つてます！

夢の言葉

「気付かれたか…」

新一が茂みの中から快斗と顔を合わせる。
お互い、目で戦つて引く暇もないような感じ。

志保も、園子も同時に茂みから出していく。

「なあ、蘭ちゃんから手を引けよ…」

「いやだね」

「俺はね、めちゃくちゃ蘭ちゃんを愛しちゃったんだよねえ」「どんなところが？」

「顔から性格まで。すべてだ」

「へえ…俺も全部だぜ？でも、おまえが知ってる蘭と俺が知ってる蘭とでは天秤に掛けるといつちのほうが重いぜ？しかも、俺のほうが蘭を知っている。」

冷静に言いあう男たち。

「あれ? ビリヒー! 聖子の家の前に?」

「へ?」

「あ、聖子ちゃん…?」

「中森さん…?」

「聖子…?」

そう、四人のいる場所は、青子の家であった。

青子は三人でいることに驚いていた。

「ねえ、どうかしたの？」

「単なる…」

「男の争いよ。」

あきれたように言う園子と志保。

何も知らない人ならば理解不能だが、青子はわかつていた。

すべて聞いていた。

先ほどの会話、すべてを。

たまたまスーパーの帰りに聞こえた、男の声。2人いることはすぐわかつただろう。

そして、顔を見ると、快斗と新一であった。という感じ。

(蘭ちゃん争い…か)

青子はそう思つて「そう、じゃあ、また明日！」と言つて家に帰つていつた。

「青子ちゃん…無理してたわね。」

「ええ、彼女にも気をつけたほうがいいわね…」

園子と志保が中森家を見上げながら言った。

そして、2人の言い合いが続いた。

「蘭は俺のもの！」

「いいや！俺のもの！」

「俺と蘭は両思いなの！」

「俺は彼女を振り向かせる！！！」

「そんなの無理だね！」

「やつてみなきや分かんねーさー」

「そうかな？！」

「何い！？」

2人の言い合いは、まだまだ続きそうだ…

そんな2人の言い合いを玄関のドアを背にして聞いている、青子が
いた。

青子は快斗の言葉一つ一つが胸に突き刺さっていた。

青子は……もうこりない存在なのかな？

蘭ちゃんのせー……蘭ちゃんわたくし来なれば……
返して……快斗を返して……返してよおお……

青子は言葉でできない思いを涙で表す」としかできない。

ふつむくことのない彼。

それでも、愛し続ける青子。

昔から好きな彼を、まだまだ愛し続ける青子。

言葉でできない思いを涙で表す」としかできない。

そのとき、ふとよみがえったのはあの、変な夢のことがった。

青子とは単なる幼馴染だよ
青子？あんな奴好めじやねーよ

「やつひいえば、中森はどうなんだよ。」

「青子とは単なる幼馴染だよ。」

「本当かなあ？好きなんだろ？」

「青子？あんな奴好きじやねーよ。」

夢が言つた言葉が・・・

現実になつて行く時だつた
…

夢の言葉（後書き）

ちょっと、後回しにしましたぁ…！

感想待つてますー。

思いを伝えて

青子は今日、工藤君を屋上に呼び出した。

放課後、夕日がきれいに見えてすゞくきれいだつた。

「ねえ、蘭ちゃんのこと好きなんでしょー? 早く告白したほうがいいよー!」

「へ?」

「蘭ちゃん、言つてたよ? 工藤君のこと、好きなんだつて、小っちゃいから好きなんだつて! 快斗に取られる前に... 工藤君がとつて、快斗の田を覚ませせて!...」

青子は一生懸命言つた。

そう、これは、蘭ちゃんの運命も青子の運命もかかってるの。

工藤君で変わる...

工藤君で変わるの...

工藤君が蘭ちゃんに相手さえすれば、快斗は青子に振り向いてくれる... -

青子はそう信じて、屋上を出て行つた。

屋上から出ると、そこに蘭ちゃんがいた。

前もつて呼び出しておいた蘭ちゃん。
なぜか悲しそうな表情。

「どうかした? 蘭ちゃん。」

「こや...ちょっと、最近新一冷たいからか...何のことで呼び出され

たのか分からなくて……」

一応、工藤君が呼び出したつてことになつてゐるけど、工藤君は何も知らないの。

「そりやつてしまんぼりしてないでーきつとHAPPYになるよー。」

「本当?」

「うんうん!」

青子は自信を持つてた。
でも、それは違つた。

確かに、初めはよかつた、作戦通りだつた。
でも…その後が違つた…

青子はそつと、2人を見ていた。

「新一、何?話つて。」

「へ?俺呼び出してね ゼ?」

「え?でも、青子ちゃんが…」

あーあ、ちょっとすれ違つてる。
まあいいか。

わかったと思う。工藤君のあの顔は…

(なるほど、中森がやつてくれたんだな)

あ、気持ちがわかつたのね！

よしよし、今すぐ出立よー。

「なあ……蘭。」

「ん？ 何？」

「あ……いや……」

つたく、度胸がない……

「もーつー男ならちやんと言ひなせこみーー。」

「へ？」

え？ もしかして眞づいてる！ ？ 「藤君の気持ち」

「事件で早退した時に習つた授業のノート見させてくれつてー。」

「はー。」

は
い
?

全く違うんですけど……

ていうか、どんだけ鈍感！？

いや、屋上とくれば告白ってわかるだろ?」など……

「あれ？違うかつた？」

「あ……いや……実はそ、うなんだよ！」

「アーティザン！」？

九二：剝二女，不子。子與女，或子也。

納得しきひつかつたの。・

「んなわけねーだろ!..?」
「へ?」

よべ言つた上藤君!

「…好きなんだよ…おまえしか俺の中にはいねーんだよ。
愛してゐる…だからその…付き合ひてくれねーか?」

「おおー。
いいなあ、そのセリフ。

貴子も言われてみたい…！」

「へ？

へえ～新一私のこと愛し

蘭ちゃんが驚いて大声を上げた。

「な、なんだよ…」

顔真っ赤の工藤君と蘭ちゃん。

「本当に…？冗談でからかってるんじゃないよね？」

「あたりめーだろ？」

「じゃあ…私も…新一のことが好きで、愛しています…！だから…私からのお願い。付き合ってください…」

「あつたりめーだ！」

よく言つた、蘭ちゃん！

2人とも両想い！

そして、恋人同士！

青子はパチパチと拍手をしながら2人の前に現れた。

「おめでとう、2人ともー青子、感激しちやつた！恋人同士になつたんだよね？」

「あ、青子ちゃんー？今の…見てたの？」

「もちのろんー！」

「ハア…」

2人してため息をつかないでよもう…

「じゃあ、キスしちゃえば？」

「はあー？」

「青子、もう帰るからー。じゃあねー！」

といつて、またドアのところに隠れて2人の様子を見る青子。

「蘭……愛してるよ……」

「新一……私もだよ？」

あ
…

キスした
…

深い深いキス。

青子も…快斗とそんなことしてみたい。

2人はキスをした後、

仲良く2人で帰つて行つた。

次の日だった。

事件が起きたのは…

思いを伝えて（後書き）

青子ちゃん、2人を見事くつつけましたあ！
お見事！

でも、次の日、大変な事件が…！！
感想待つてます！

悪魔の降臨

「蘭！よかつたね、両想いになつて！」

「え？え？」

「おめでとう、工藤君。」

「おめでとーー！工藤！」

「はい？」

次の日、新一と蘭が登校してくると、2人が両想いになつたことをなぜか知っていた・・・

実は・・・すべて青子が知らせたのであった。

まあ、園子と志保だけに話したのに、園子がクラス中にばらまいた、とでもいえば簡単だらう・・・

「快斗、おはようー！」

いつものように話しかけてみる青子。でも、快斗は答えようとしなかった。

「快斗？」

「工藤・・・」

なんと青子の予想だと、自分に振り向いてくれるはずが新一をすぐ怒っていたのであつた。

青子はやばいことになつたと思った瞬間だった。

快斗が新一に飛びかかったのであった。

「新一！あぶない！」

快斗の手にはカッターのような刃物を持っていた。

蘭が新一の前に立った時、

ズサツと音がした。

「蘭！」「蘭！」「蘭ちゃん！」「毛利！」「蘭！」「蘭！」「蘭！」「蘭！」

新一をかばった蘭が代わりにおなかを深く刺されたのであった。

蘭は血だらけのおなかを押さえる。

「蘭！今すぐ、保健…いや、とにかく、救急車よ！あと、先生にも連絡を！」

志保がみんなに命令する。

快斗が真っ青な顔をして蘭を見ていた。

「てめえ…蘭になんてこと…」

新一が快斗の胸ぐらをつかみいまに殴りそうな声で言つ。

「ら…蘭ちゃん…」

快斗はそれしか言えなかつた。

その言葉に新一は力チンと来た。

大きな音が教室に響く。

快斗の頬が赤くなっていた。

ぶつたのは…

新一じゃなく、

園子だった。

「あんたねえ……まず謝るのが先じゃないの……？」蘭がどれだけ痛がつてゐるか……わからないの……？
あんたのせいだ……あんたのせいだ……！」

園子は怒りに震え、もう一度殴りそつた勢い。

と、その時、「やめて……もひいいから……私は、平氣。だから……わへ、誰かを責めるのはやめて……！」

苦しそうな顔をじつじつと見つめ、一生懸命叫びつづけた。

「蘭！しゃべるな……！」
「お願ひ……誰も……責めないで……！」

痛い…

それだけの感情が蘭を襲う。

「蘭…もういいから…」『めん…』

園子はそういうつて蘭の田の前に立つて、「もうちよつとで救急車来るから」と言つて励ます。

新一は怒りに震えるばかりだった。

「新一…怒るだけじゃ…何も進まないよ…？」

蘭の声は震えていても…

優しい声だった。

そんな声で、新一は一旦怒りを抑え、蘭とともに救急車へ乗つて行つた。

病院へ着くと、蘭は手術室へと運ばれた。

「工藤君、少しは落ち着いたら?」

手術室前をうろうろと歩く新一。

「これが落ち着いてられつか…」

「あたしだつて落ち着いてなんかいられないよ、志保。」

「そうね、蘭ですものね。」

三人はそれきり黙つてしまつ。

何も言うことのできない。

ただそれだけで、蘭を待ち続けていた。

「あ……！」

園子が声を出す。

手術中というランプが消えたのであった。

中から医者が出てきて

「もう大丈夫です！あとは入院して回復するのを待つだけですから

……」

医者の言葉に三人はホッとして、「よかつた」とつぶやいた。

「毛利さんはあと一時間後には目を覚ますでしょう。」

医者はそういって三人を後にした。

三人とも蘭のいる病室で静かに蘭の寝顔を見つめていた。

蘭は新一をかばった。

新一はすべて自分の責任と感じているようだった。

自分がもつとしつかりしていれば、こうなることはなかつた。

「蘭ちゃん！」

途中で青子が病室に駆け込んだ。

「あ、青子ちゃん！」

「蘭ちゃんは？」

「今寝てるよ…！ありがとね、来てくれて。

「青子だつて蘭ちゃんの友達だもんね！」

青子はにっこり笑つて病室を後にした。

でも、次に来た人に悪夢が遅いかかる。

悪魔の降臨（後書き）

次来た人って、誰なんでしょう…？

蘭ちゃん、よかつた…！回復できるようになつて。
感想待つてます（^○^）／

男の悲鳴

「…黒羽…」

新一が小さなつぶやくような低い声で言った。

ドアを後ろにして立っている快斗。

快斗を睨む園子、志保、新一。

複雑な視線が快斗に向けられ、快とはいられるような状況ではなかつたが、持ち前のポーカーフェイスで焦りを隠していた。

「蘭ちゃんは？」

「手前えが刺したんだろ？自分で考えてみろよ。」

「そんなんじやわからねーな」

「なら担当の先生にでも聞きな。」

「ハツ、どうしても自分たちではいえねーよつ…」

「言えるわよ？」

声を出したの志保だった。

志保は冷静で相手を見下しているようだ表情で話を続けた。

「私たちにだつて口はあるんだから言えるにきまつてるじゃない…」

「あ、そう。で？蘭ちゃんはどうなの？」

「蘭の」と、気安くちゃん付けで呼ばないでくれる？

「なんで？」

「あなたが傷つけたんでしょう？蘭だって嫌がるはず…まあ、それ

はないとおもうけど。」

志保はいたつて冷静、しかし、その冷静さが怖い…

「蘭が一番傷つくの、知ってる？」

「？」

「新一君が死んじゃつたり、傷ついたり……そして、蘭のもとから姿を消すこと。つまり、黒羽君がやろひつとしたことはすべて、蘭が傷つくことなんだから……！」

園子も応戦する。

「俺はな、蘭に何かあつた時はな……やつたやつを探偵でも殺しに行く。特に蘭が死に至つた時は派手な殺し方だからな……」

「お、おい……今殺るわけねーよな？」

びくつきながら言つ快斗。

震えているのが一言でわかる。

その声を聞くと志保がハツとひらめいたように

「なら、新しい実験台にでもなる？」

「いいわね、それ……」

「いいな……！」

三人が不敵な笑みを浮かべる。

快斗はその瞬間とつかまつた瞬間、一階の叫びをあげた・・・

男の悲鳴（後書き）

ちょっと早い話でした
タイムアップでしたあ
感想待つてます！

劇の台本

蘭が一週間後に田を覚ました。

学園祭まであと三週間弱。

蘭が目を覚ましてことを知ると、クラスメート（特に女子）が病室にぞやぞやと入ってきた。

病室にもともといた新一、園子、志保は驚きながらも蘭に話しかけていた。

「そういえば園子、私と新一、劇の主役よね？」

「ええ、そうよ。」

「セリフ分かんないし、名前が…」

「ああ、それね。」

園子が蘭の話を聞いて、かばんから一枚、「シャツフルロマанс」と書かれた本を新一と蘭に渡す。2人はこれを一目で分かった。

劇の台本だと…

「何何…？あらすじはひとつ…ええ！？またこれ？」

「その続編つてとこ。前は事件で…」

「あ、そう…」

「それに、志保がいるしね。」

「え？」

「志保は召使役、でもその召使はスペイツてこと。しかし、そのスペイはいつのまにか愛してしまつ…だから、そんな役ができるのは志保だけってことで決まったのよー！」

「ふ〜ん…」

「まあ、ハート姫とスピードキスしちゃうんだけど…」

「え！？」

「いいじゃない、あんたたち恋人同士なんでしょう？」「で、でも…ねえ？」

蘭が新一に話を向ける。

新一も顔を真っ赤にして何も言えない状態。

2人して真っ赤な顔をしているので志保はあきれ半分に
「まあ、工藤君のことだから本当にしちゃうわよ、きっと。だって
愛しの彼女が目の前、しかも顔が近いのにしないって方がおかしい
もの…ねえ、工藤君？」

面白半分で言う志保に新一は

「わかったよ…すりやーいいんだら？」

と言ってしまった。

これには蘭も驚きだった。

「ちょっと、新一！お父さんが来るんだよ！？」

「いいつて…」

「あんたねえ…」

蘭はジト目で新一を見るがお構いなし。
そして、台本のセリフを覚えて行つた。

「えつと…『スピード、一緒に遊びませんか？』

「『駄目です。まだどこかで貴女の命を狙っている者があります。』

「『そうですね…待つてください、今すぐ召使を呼んでお菓子で

も食べましょー。』

『お待ちしておりますね。』

ここでいつたん2人はハアとため息をついた。

「どうかした？」

「全部敬語なのよ……なんか、新一じゃないし。」

「蘭じやないし。」

「ぐちぐち言わずに暗記よ！ 暗記！…！」

園子は睨みながら言った。

「あ、次志保のセリフ。」

「はいはい。『どうかなさいましたか、姫さま。』

『『いえ、お菓子を思いまして…』』

『『なら、少々お待ちを。』』

『『はい…』』

これまた一回ため息。

2人には苦労の連続であつただろう…

あと二週間弱。

それまでこ、

悪夢が降臨しなければ
…

二週間弱
…

降臨すれば

も少しして短くなるであろう

劇の台本（後書き）

悪魔が降臨する時、蘭と新一の運命は？
今回、快斗と青子は登場しませんでしたあ！
すみません（へへ）
感想待つてます！

過去～約束～（前書き）

なんか、いきなり過去になっちゃったんですけど…すみません、快斗と青子の過去を…青子視点です！

過去／約束／

青子は…忘れてないよ?
あの日…約束したよね?
青子は信じ続けてるよ?

快斗のこと、好きだもん

「お～い、青子！」

「なによ、快斗！」

懐かしい、小さい頃の快斗。

快斗がいつものように青子に話しかけてくる。

そんなのがいつもの生活だった。

「今日、あのきれいな桜が見える土手へ行こうぜー。」

五月。

それなのに桜が見れるなんて不思議。

でも、江古田の小さな土手の近くにある桜は今が見ごろ。それは今
でもそう。

小学一年生の青子と快斗たち。

青子はその時から快斗のことが好きなの。大好きで今までずっと快
斗しか見てなかつた。

青子たちは放課後、土手へ行つて寝ながら桜を見ていた。

きれいな桜だつた。

こつやつて快斗と一緒に見れたことはとてもうれしかつた。
今は、ないけどね……

「きれいだな……」

「うん……とってもとってもきれいー。」

「ああ……」

青子たち二人はそのまましばらく桜を見つめていた。

小さな花びらが一枚一枚散っていく。

小さな花びらが一枚一枚旅に出る。

別れを惜しむことなくヒラリヒラリと華麗に散っていく。

そんな堂々とした花びらたちは静かに緑色に染まつた地面にたどり着く。

たどり着く場所はそれぞれちがう。
決まっていなくて

その花びらの運命。

人間と同じ。

花びらもその先の運命がわからない。

そう、今のように。今のように…すれ違つてばっかり。
いつもいつも仲良しだったあの頃はもう戻らないの?

青子は…戻りたい…

いつもこつも喧嘩ばかりして、でも、轟子はその日常が楽しかった。

快斗と轟子争っているのが乐しかった。

快斗の隣にいることがうれしかった。

でも、もひみんな日常はないのかな…？

轟子はもひ快斗の隣にいることが許されなのかな？

轟子も花びらのよひに描しむかり… 告じてください…

「なあ、轟子…約束しようぜー…？」

「ひこんだ…あの時…快斗こいつた…

「何を？」

「大きくなつて、うだな…つん…高校生になつたらまたここに来るつて…」

「え？ 本当！？」

「ああ！ 約束な！ えつと… 今日の高校生、うーん、十八歳になつたらな！」

「とこりうことは… 今小学一年生だから… 今八歳だから、十年後つてこと？」

「そう…」

「うん！ わかった！ 十年後、また来よつ！ 約束、破つたらハリセンボン入れてやるんだから！」

「はいはい、青子もな！」

快斗のこと… 好きでや…

あいつと快斗忘れてるよね…

快斗… もひ… 青子苦しこよ…

今、昼過ぎの最後の休み時間！

今日なんだけど…

ついで…

蘭ちゃんは確か病室！

そんなことより、五月…

つてことは、絶対的に今日なんだ…！

どう…します。

青子はやつれて、快斗の机にメモを置いといた。

『快斗へ
約束の日、約束したあの土手で
青子』

- ・ もじ、蘭ちゃんのまつ毛で引つてこないとしたら、青子はあがひある・
放課後になると、青子は走つてあの土手へ向かつた。

でも、もし青子の所に来たら青子はあきらめなこよ…

そして、咲耶…

まあ、たぶん来ないと想つ。

でも、信じたいよ…

来てくれるつて

快斗…待ってるからね

信じて待ってるからね

過去～約束～（後書き）

「ああ、快斗は来るのでしょ？ うかー？」

青子、待ち続ける結果は？！

感想待ってます！

まだかえる」とのできない思い

午後7時。

少しずつ暗くなつていぐこの時間帯。

青子はずっと土手で快斗を待つてゐる。しかし、一向に快斗が来る気配はない

(忘れちゃつたのかな…約束)

心中では来てくれるつて信じていたはずだった。でも、今はもう完全ではないがほとんどあきらめている。

青子は一人、花びらが散つていいく様子を見ていた。

周りを見てみると、恋人同士がこの桜を見に来ていた。

2人で肩を並べて無言のまま花びらを見ていた。

たまに「きれい…」とか「すゞ…」とか言つてゐる。

青子は一緒に肩を並べてくれる人がいない。

その時、青子の携帯電話が鳴つた。

「あ…はい…中森です…」

誰かから来たかどうかも確かめずにでてしまった青子は少し後悔を

しながら相手の声を聞くのを待っていた。

(誰だろ… ていうか、でないなあ…)

わいれてくるのは

『はあはあはあ…』

とこり声だけ。

(誰なの?これ…まさか、悪戯電話?)

青子はそつ思つて「切りますよ?」

といつた。

それを聞いたのか相手が
「ま…待つてくれ…！」

といつたのであつた。

(は…もしかして…)

詐欺師!?)

「あんたねえ…用件はいつたいなんなのよー。」

青子は半ばキレながら怒鳴るよつた声で言つた。

しかし、電話の相手は「待つてくれ」というだけだった。

青子は仕方なく何も言わずそのまま黙つてその場で座つていた。

(誰が来るの…)の場所に…

そういうえば…やつきの声…誰かに…)

青子はそんなことをずっとと考えているところなり、田の前に真っ赤なバラが出てきた。

バラの先には温かそうな手があった。

(だ……誰……?)

青子はやつと思つて上を見上げた。

すると、そこには青子が泣きたくなるほど待っていた人がいた。

青子ときちんと田を合わせている。

「か……快斗……?」

会いたくてたまらない、快斗が青子の田の前にいたのであった。

「来てくれた……の?」

「あ……約束、覚えていたよ……」

「どうして……どうしてこんなに遅かったの……?」

「母さんにお使い頼まれたんだよ……」

「へ?」

「わりーな……待たせちまつて。」

「快斗……ありがとう……来てくれてありがとう……?」

青子は思い切り快斗に抱きついた。

快斗は初め驚いていたが、ポンポンと青子の頭をなでた。

「快斗、来てくれないんじゃないのかって思つてた…でも…来てくれて本当によかつた…」

「おじおい、俺がそんな簡単に忘れるわけねーだろ?」

「もうかな? 快斗は忘れっぽいから…」

「それはおまえだろ?」

「な、何よー!」

いつもの会話に戻る2人。

(こんな時間が…いつまでもいつまでも続けば…いつまでも…)

青子はもう思つていふとんと快斗から離れ、

「快斗…青子ね、ずっと前から快斗のこと大好き…ねえ、もし蘭ちゃんのこと、諦めていいのなら…青子と付き合つて…・・・青子…いつまでも待つからや…」

「青子…」

「快斗のこと大好きだから…」の気持ちはないつまでも変わらないよ

…

青子は半ば泣いていた。

(言つたけど…快との答えは違つ…青子にはわかるよ…)

「悪いな… もう、遅いんだ青子…」

「…」

「俺は、まだ蘭ちゃんを忘れない…」

「なら… どうして… どうしてここに来たのよ…」

「え?」

「どうして… どうして青子の所に来たのよ… 蘭ちゃんのこと好きなら… 蘭ちゃんのところにでも行きなやこよ…」

「でも… 禁止されてるし…」

「何よ… 青子、たつた今快斗のひと嫌になつた… 快斗なんかもう知らな…」

青子はドクドクなり、走つて家へ向かつていった。

快斗のひとと頭がいっぽうだつた。

(もう… 快斗は青子のことをクラスメートとしか見てないんだ…)

青子は血もく戻り、わざわざと血室へはってベッドに寝転がり、声を泣き声に泣いた。

(遅いなら… 期待させないでよ… バカ…)

何も言えるひとのない文句。

それだけが青子の頭の中で動き回る。

快斗の言葉、一つ一つが青子と蘭との差。

青子にはなくて、蘭にはある、この悔しさ。

それが青子をを苦しめる。

(蘭ちゃん… 返してよ… 快斗を返してよおおお…)

蘭はまだ入院中。

次の日、青子は学校を欠席した。

昨日のことがショックで行く勇気がなかった。

新一は蘭の付添人として休み。

(小五郎は近所の人たちと一週間の旅行で蘭がけがしたことを知らない。(というより、蘭が言わなかつた))

「蘭も新一君も休みねえ…なんか休み多いね。」

「本当ね。蘭がいないとさみしいわ。」

「あーあ、主役一人が休みはありえないよね…」

「ねえ、黒羽君、学園祭が終わつたら私の家に来てくれるっ前いつたでしょ？実験台になるつて。」

「ハツ…」

「それじゃあ…楽しみね、その日が…」

志保は不敵な笑みをもらしながら自分の席へと戻つて行つた。

快斗が実験になる日は快斗が泣く日もあるだろ?…

まだかえる「」とのでない思い（後書き）

とひといひ顔立した青木ちやん！

どうなるの…！？

感想待つてまー！

我慢は禁物

青子は一日連続で休んだのであった。
理由は蘭ちゃんに会うため。

走って江古田総合病院に向かう青子。

その先に待っているのは蘭ちゃん。

きっと工藤君もいるんだろうな……

2人で一コ一コ笑いながら話しているんだろうなあ……

青子も、快斗とそんな関係になつてみたい……

病院に着くと、予想通り、2人で一コ一コしながら話していた。

「あ……あのあ……」

青子がそつとはいつしていくと2人はびっくりしたように振り返っ

た。

「あ、青子ちゃん…？」

「どうして…？」

2人して驚いて…

可愛いなあ…

「ううん、ちょっと、蘭ちゃんに話したいことがあってねえ、工藤君は外してくれる？」

「え？ あ、ああ…」

工藤君は答えると病室を出て行った。

青子と蘭ちゃんの一人きり。

蘭ちゃんは相変わらず二口二口しながら青子のほうを見ててくれる。そんな笑顔に快斗はに惹かれていたんだろ？…

「何かあつたんでしょ？」

蘭ちゃんが青子の心を見透かしたよつて言った。

あ… 図星…

「そんな顔してるよ…」

蘭ちゃん…

「青子ね…ふられちゃつた…」

「え…？」

「快斗にね思い切つて告白したらね、もう遅いんだって。」

「どういつ…こと…？」

「だから…だから…」

蘭ちゃんのこと好きなんだって……！

そんなこと…

言えるのはすでしょ……？

でも……口が否定をする。

いつちやいけないって。

いつたらダメだつて。

できこないよね……人のプライベート情報だもんね……

「蘭ちゃん……？」

青子は気がつくと田にいっぱい涙をためていた。
蘭ちゃんが心配してゐる…

バカ…泣くな…

泣いたら…蘭ちゃんが悪くなっちゃうよ…

でも、涙は止まることはなかつた。

本当のところ、つらかつた。

快斗が蘭ちゃんに向ける笑顔、

言葉、

話し方。

すべてが辛かつた…

そして、何より、快斗にふられちゃつたこと。

お父さんがたくさん青子に話しかけてくれたけど、青子は答へたくなかった。

知られたくない…

青子は…もう無理…

限界だった。

みんなの前で泣くことは許されなかつた。

だつて、かつて悪いもん…

「立二三事？」

⋮
?

「限界なんでしょう？」

泣いて大丈夫だよ…？誰も否定はしないよ…？それに、私と青子ちゃんしかいないじゃない…？」

優しい声で青子にいつづくれる蘭ちゃんは天使のような人だった。

青子の気持ちがわかつてくれた…

恵子だってわかつたと思ひナビ…でも、蘭ちゃんがわかつてくれ

た

「我慢はダメだよ？泣きたことは泣いたら……？私だって余計な時
だって泣くんだから……」

蘭ちゃんは一つ一つの言葉が温かい…

青子にはなー…

でも、蘭ちゃんにはあつたんだ…

「あ……ひ……ひ……あ……つ」

少しづつ声を出しながら泣く青子。

蘭ちゃんはやれこまなさしで青子を見ててくれている。

「つらかったんだね……」

「たくさん泣いて平氣だよ……？」

いろんなことを言ってくれる蘭ちゃん…

青子の励ましだった。

「あああ……つ快斗お……つ快斗お……つー

気付いたら快斗つて連発してた。

悔しかれと哀しかれがじりゅあぜになつて青子は蘭えられなかつた。
蘭ちゃんは「そつか、そつか……」と言つてくれた。

しづめりくして、青子は泣きやむとこれまでのことをすべて蘭ちゃんに話した。

蘭ちゃんは反論することなくちゃんと聞いてしてくれた。

「 ひとつこのわかなの…」

「なるほど…快斗船にふられちゃったんだ…」

「うん…」

「青子ちゃんは強いんだね…」

「え？」

「私だったら一週間ぐらこ泣いてるなあ…でも、青子ちゃんは我慢して涙をこらえていたんじょ…あ！」ことじだよ…」

「蘭ちゃん…」

優しい声で言う蘭ちゃんはかっこよかつた。

そして、天使のようだつた。

「蘭ちゃん…快斗ね、やっぱり青子じゃない人が好きみたい…」

「きっと振り向いてくれるよ…アピールするんじやなくて自然のままで青子ちゃんらしさを出したら?」

蘭ちゃんのアドバイスを頭の中にメモをする。

フムフム…

「なるほど…」

「青子ちゃん、めりとさせになるよー。」

「あつがとつー。」

元気出てきた…

もう少し、もう少し自分を磨いて…！

ありがとう…蘭ちゃん！

我慢は禁物（後書き）

蘭と青子の友情編でしたあ
蘭、優しいですね～！
感想待つてます！

退院…そして…

俺の名前は黒羽快斗。

蘭ちゃんのことが好きで今でも想い続けている。

でも、蘭ちゃんには彼氏ができた。

俺のライバル、工藤新一ってこう奴だ…

俺はその時、工藤に怪我をさせようとした。
でも、蘭ちゃんがかばって病院に運ばれた。

そのことで、俺は罰として富野の実験台となつた……

そして、今日、蘭ちゃんが退院ということになる…

「おはよひ、蘭ちゃん！」

いつものように俺の隣にいる蘭ちゃんに挨拶をした。
まあ、返事はないと思つけど…

「おはよひ、黒羽君。」

あ、かえってきた。

「お、怒っていないの？」

「そりや、怒ってるよ。でも、いつまでも怒ってたって始まりない
じゃない。」

蘭ちゃんの優しさにひかれていく俺。

でも…

何か違う気がした。

たしかに俺は蘭ちゃんのことが好きだ。

でも、何か違う気がした…

本当に俺は蘭ちゃんのことが好きなんだろ？

まさか
な

ハハ
・
・
・

「何なにが丘じかねえば？」

へ？

蘭ちゃんではない声が左隣から聞こえてきた。

その声の主は鈴木だった。

「蘭のことは…好きなんでしょうが丘じかねー。」

小さな声で俺に告げる。

そつか…皆丘つてこいつもあるんだ…

「やうだな…」

「早じわね、返事。」

「そつかやうだ。」

乾いた声で言つ俺とあきれたまつひ鈴木。

「なあ、蘭ちゃん。青子は？」

「うーん、青子、来てね なあ……」

「え……？心配してたの？」

「へ？」

なんだあ？

目の色を変えやがったぞ……？

「心配してたのかって聞いてるのー！」

そんな怖い顔をしなくたつて……

そりや、幼馴染だから……？

「あ、いや……ベベベつに、し、心配なんて……」

「ふう～ん……顔、真っ赤。」

「へ？」

な、なんでおれ、青子の「」と心配なんか…

てこりか…俺…何でてれてんだ?

てこりか…

俺、本当に蘭�やんの「」と好きなのか…?

今までではいつも決めてたけど…

なんらかで変わった。

そうだ…

青子に叱咤されてからだ…

俺は…本当に蘭ちゃんが好きで…

情子のことは本当にただの幼馴染みと思っていたのだらうか……？

俺の中にある、真っ白な記憶の扉が今、開けられる……

退院…そして…（後書き）

おおっ？

快斗、青子のことが…っ?
簡素待つてます！

過去の記憶（前書き）

出来ることは原作よりもですが、その後を考えましたので変になつてします。

「ん？おめーも誰か待ってるのか？」

「うん…お父さんとお出かけするの…でも、お父さんは仕事で行け
ないかも…って」

「…」

ポンッ

「…」

「…」

「俺、黒羽快斗ってんだ！よろしくなー！」

「…快…斗…？」

「そうーおまえは？」

「私は…中森青子！」

「へ～、じゃあ、みゆじへなー！青子！」

「よろしく、快斗ー！」

時計前での出会い。

やっぱ、会れることのできない出会いだった。

でも、俺は完全に忘れてた…

小学六年生のことだった。

青子と俺はいつものように下校道を並んで歩いていた。

同級生にからかわれた毎日。

俺は、青子を特別な存在としてみていた。

なぜ、青子だけが特別な存在だったのだろう？

いまだに疑問符である。

「それでな、あいつがよー、間違つて先生にバケツをかぶせひやつたんだぜーーー？」

「ええーーー？先生かわいそつーーー！」

「そんでな、一時間ぐらい怒られてたぜーーー！」

「その人もかわいそうだね……」

「まあ、自業自得だな。」

「いつやつてたべかさしゃべつてこたのであつた。

今はもう、ない…

俺が避けてる？

いや、違う。

俺はいつの間にか蘭ちゃんに向いてしまつていた。

壇子とは話がなくなつた。

恥ずかしいから？

違う。

あいつとは單なる幼馴染だ…

本当にやつだるうつか?

そう思つていたはずだったのに…

俺は青子をがまつていたんだろ？

「それでな、あいつ、一時間怒られた次の日もおんなじ先生にまたおんなじことやつて怒られたんだぜ？」

「アハハッおバカさんだね！」

そうやって楽しんでいたはずだった…

青子が「おバカさんだねー」の「ね」を言い終わる前のことだった。

「青子！……あぶねえ！……！」

青子が一いつ瞬間に振り向き、俺が青子の体を突き飛ばす。

「え……？」

青子の声が一瞬聞こえて、次には

「快斗のおおおおおおおおおお……」

と言ふのであった。

キキーッといづブレー キ音。

ダンッといづ何かがぶつかる音。

ぶつかつた何かは宙に舞い、2、3メートル飛ばされ、ドサッといづ音を立てて地面に着いた。

俺はその時に氣をほとんど失っていた。

聞こえてくるのは、青子の声だけ。

「快斗！快斗お！しつかりしてよお、快斗おー！」

泣き叫ぶ青子の声。

俺は一生懸命口を動かす。

「だいじょうぶだ平気だけがないか？」

震えていることは俺にもわかつた。

青子は泣きながら俺の言葉を聞く。

あ…救急車だ…

それが聞いた途端、俺の意識はフツと失つていった。

気がついたとき、俺は病室にいた。

両親が俺を見つめていた。

母さんは今にも泣き出しそうな顔をして。

もちろん青子もいたのだった。

「青子……？」

俺はなぜか最初に青子の名前を呼んだ。

それもいまだ不明である。

「快斗！ 気が付いたのね！」

母さんが希望を持った声で言つ。

「母さん……俺……」

「快斗、青子ちゃんをかばったんだよ……」

「え？」「

「バランスを崩した青子ちゃんがトライックにひかれそうになつてあんたがかばつたのよ・・・」

母さんが哀しそうな目で俺を見る。

「青子を…」

「快斗…『めん…』『めんねえ…』…」

泣いている青子に斗おさんが青子の肩を抑える。

俺は、青子をかばつたのかと思った時、どうして命を張つても守りたかったのだろうか…？

単なる幼馴染だらつ？

でも、その時はすぐ違つかった。

「こつを守りたい。」

命を捨てても俺は…このつを特別以上の存在だと思つていた。

あの気持ち何だったのだろうか…？

「こつのことを、ずっと想っていたのだろうか…？」

今現在に戻つてみると、青子のこゝとしか考えられなくなる。

俺の本当の心は…

青子にあつたのかもしれない…

本当は

青子のことのが好きなのかもしれない…

その気持ちを

俺は封印していたのか？

いぢ
..

気が付いたことしぬかつたんだ…

幼馴染と決めつけていたから…

過去の記憶（後書き）

快斗君、やつと気持ちになりましたね！
本当によかったです！
リクエスト、ありがとうございました！
感想お待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1162ba/>

願いよ…

2012年1月8日20時49分発行